



平成一二年（あ）第六一一号

上告趣意書

被告人 廣野 秀樹

右の者に対する傷害被告事件の上告の趣意は次のとおりである。

平成一二年六月七日

右弁護人弁護士 山口 治 夫

最高裁判所

第二小法廷 御 中

記

一審裁判所は被告人の安藤健次郎（以下被害者という）に対する傷害を認定して被告人に対し懲役一年八月の実刑判決を言渡し、原審は被告人の控訴申立を理由がないとして控訴棄却の判決を言渡したが、これは刑の量定が甚だしく不当であり、これを破棄しなければ著しく正義に反するので破棄のうえ相当なる判決を求める。

被告人は平成四年八月三日金沢地方裁判所において被害者の長女文に対する傷害・準強姦の罪により懲役四年の実刑判決を受けたのであるが、被告人はこの犯罪は周囲の者達の画策により仕組まれたものであるとして、この判決に対し控訴上告をし、その上再審の申立までして自己の無実を晴らそうと思っていたが、いずれも棄却されてしまったのである。そして平成九年一月一七日刑の執行満了により福井刑務所を出所した後においても、この思いを貫徹しようと思ひ、準強姦の被害者の父である被害者に折衝しその協力を得ようとした過程において本件傷害事件が発生してしまったのである。

被告人は前判決が誤りであり、これを再審によって取消してもらうべく被害者の協力を得、或いは娘文との結婚の承諾を得ようとしたのであるが、被害者

は被告人の申出に対し協力すべき義務は全くないのである。従ってこのような被害者に対し協力をお願いするには、前判決が誤りであることを具体的事実に基づいて摘示し、かつこの誤りを再審によって是正するには、被害者がどのような事項について協力していただけるのかを理を尽くしてお願いしなければならないところ、被害者或いはその家族の困惑を全く考慮することなく、しばしば被害者の自宅や勤務先或いは携帯電話に連絡して折衝し、これを嫌った被害者が手紙で書くようにと言ったことを被害者が被告人に協力を約束したと早合点して長文の手紙や文書類を被害者に送りつけたのである。これに対し被害者が返事をしなかったため被害者の留守宅に押しかけ、警察に連行された後、被害者と警察で話し合い「今後は一切被害者やその家族と接触しない」と約束した。

しかしながら被告人はその翌日の平成一一年八月八日の夜に被害者宅を訪れたので、この事実が娘文に知られては困ると思った被害者は、本件犯行現場に被告人を誘い話し合いをしたが全く話がつかず、その中で被害者の吐いた言葉に被告人が立腹して本件犯行が行われたものである。

前記のような状況を考えると被告人の本件犯行の責任は重大であると非難されても止むを得ないところである。

一、被告人の被害者に対する折衝の仕方は或る意味では執拗であったのであるから、被害者においてその間に警察に連絡するなど、何らかの措置を講ずることができたのではないかと思われる。また被害者が被告人に協力するのではないかと思われる言葉を言つて被告人をその気にさせ、犯行当日これまでの言葉と相反するような言辞を吐いて被告人を激高させた嫌いがあり、これらのことが本件犯行の誘因となつたものであり、この点は以下の事項と相俟つて考慮さるべきものと思われる。

二、被告人と話し合いをしたとき、被害者は不用意にも「お前がヤケを起こして暴れ込んできたら困るから今まで仕方なく相手をしていたのだ」とか「前は犯罪者やろ、犯罪者から連絡すること自体間違いや」という言葉を吐いて被告人を必要以上に刺激してしまつたのであり、このときどうして被告人に対し「これ以上話し合うことはない、娘との結婚は認められない」という

ような言葉を言わなかったのか残念の極みというべきであり、被害者と話を
する前には被告人には乱暴をしようなどという意思は全くなかったのである
から、この点についても考慮されて然るべきものである。また被害者の怪我
の程度は軽微であったことも参考にされたい事項である。

三、被告人は前刑出所後、建築作業員として真面目に働いてきたものであり、
本件犯行によって逮捕された後はその動機態様について捜査官に包み隠すこ
となく申告し、今後再び被害者およびその家族と接触するようなことはしな
い旨誓約して反省している。被告人は反社会的組織に加盟しておらず、今後
は母と共に郷里に帰り、被告人が三才の時から女手一つで成育してくれた母
親に孝養を尽くすことを約束しているものであり、母の恩に報いようと決意
している被告人を母親が健康なうちに社会復帰ができるような措置を講ぜら
れるよう願って上告趣意とする。

